

Bio Quest

No. 16



～目次～

ご挨拶

- 顧問挨拶 ----- p. 1
- 部長挨拶 ----- p. 2
- 前部長挨拶 ----- p. 3

部活動

- 石坂産業 ----- p. 4
- 知床合宿 ----- p. 6

班紹介

- 魚 ----- p. 8
- 虫 ----- p. 11
- 奇蟲 ----- p. 14
- 爬虫類・両生類 ----- p. 15
- 鳥 ----- p. 18
- 哺乳類 ----- p. 20
- 植物 ----- p. 21

- 飼育生物紹介 ----- p. 22
- 部員紹介 ----- p. 31
- 編集長挨拶 ----- p. 32
- OB 一覧 ----- p. 33
- 編集後記 ----- p. 34

顧問あいさつ

今年からモンゴルスタディーツアーが再開され、今夏、6年ぶりにモンゴルに行ってきました。ホステイ国立公園では、野生の馬である「モウコノウマ」や大型齧歯類のタルバガンを見ることができとても幸運でした。

ただ、幸運も束の間、私の左眼に痛みが！なんと、左眼にハエが卵を産みつけたようなのです！！いつ孵化するのか怯え、「隻眼の関口」になることも覚悟していたのですが、ウランバートルの病院の名医のおかげで無事に取り除くことができました。ハエが眼に卵を産むのを防ぐには、メガネをかけるのが良いとのこと。今までは裸眼であることはメリットしかないと考えていましたが、意外なデメリットがあることを学びました。世界にはまだまだ想像もしないことがたくさんあるのです。皆さん、若いうちにいろんな世界に触れてください。

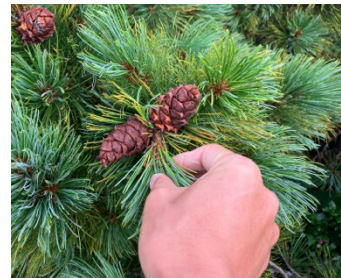


野生の馬「モウコノウマ」

(顧問 [redacted])

KS プロジェクト知床実習に参加した皆様、大変お疲れ様でした。橋を見ればその界隈にシマフクロウが出るかどうか分かるということ、シマフクロウは見た目はもふもふだけれど骨格標本にすると実はスタイリッシュだってこと、ヒグマはハイマツの実が好物で、それは人間が食べても美味しいこと、そしてヒグマは本当にハイマツの実が好きなこと

(笑) ←笑えない、そんなヒグマに「スイッチを入れている」のは他でもない人間であること、等々、学んだことを挙げればキリがありません。現地に赴き実物に触れたりそこで活動している方々のお話を伺ったりすることの重要性を再認識した次第です（とはいえ、どうしたって我々がそれぞれ認識している世界は全て脳が再構成しているものなのですが、...）。



若くしてこんな体験ができたキミたちは羨ましい！恩着せがましいけれど親に感謝なさい！笑 知床で何から何までお世話になりましたワイルドライフプロの葛西さん（海城OB）にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。（顧問 [redacted]）

ハイマツの実（球果） 250820@知床峠

部長挨拶

高校生物部長

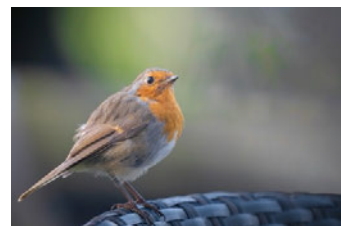
本日は第134回海城祭一滞一にお越しくださいまして、誠にありがとうございます。今年の夏も大変暑い中、生物部員達はこの文化祭のための準備を一生懸命してきました。ぜひ楽しんでいただけましたら幸いです。

さて、今年も部員達は様々な場所で生物観察をしてきたようです。近年生物部内で人気が出てきた爬虫類や両生類などのペット的な飼育だけでなく、しっかりと野外観察にも励む部員達が依然多いことに嬉しく思います。もちろん僕もこの夏は受験勉強前最後の夏休みということで、しっかりと生き物観察をしてきました。知床合宿の話などについては後ほどのページで詳しく書いてあるので、ここではイギリスの話をしたと思います。

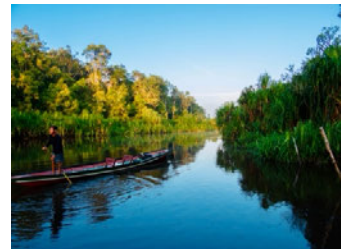
海城では海外研修としてイギリス研修等ものが実施されており、今回僕もこれに参加してきました。イギリスはネイチャーポジティブ的思想が進んでいると言われており、街の近くでも様々な生き物を見ることができるのではないかと期待していたのですが、到着後に早速見ることできたものが右の写真。羊がたくさんいました。このように街のすぐ郊外に農園や牧場が広がっているのも身近に自然に触れ合うことができます。僕は鳥が好きなのでもちろん野鳥撮影をたくさんしました。例えば右の写真。ヨーロッパコマドリという鳥で、現地ではロビンと呼ばれています。ヨーロッパの文学作品に頻繁に登場してくるので日本での知名度も比較的あります。日本のコマドリは深い溪流の中まで行かないと見ることができないので身構えていたのですが、そこら中で見ることができてとても感動しました。この他にもブラックバードやアオガラ、アナグマ、ノウサギなど、様々なヨーロッパ固有の生き物を見ることができました。去年は人の手付かずの自然をボルネオで体験し、今年は人々に身近な自然をイギリスで体験するという点で、とても良い体験になったと思います。僕は今年で引退となってしまいますが、生物部員にはこれからも飼育だけでなく野外での観察を続けてほしいなと思います。



↑イギリスで見た羊達



↑ヨーロッパコマドリ



↑ボルネオ島

次期部長挨拶

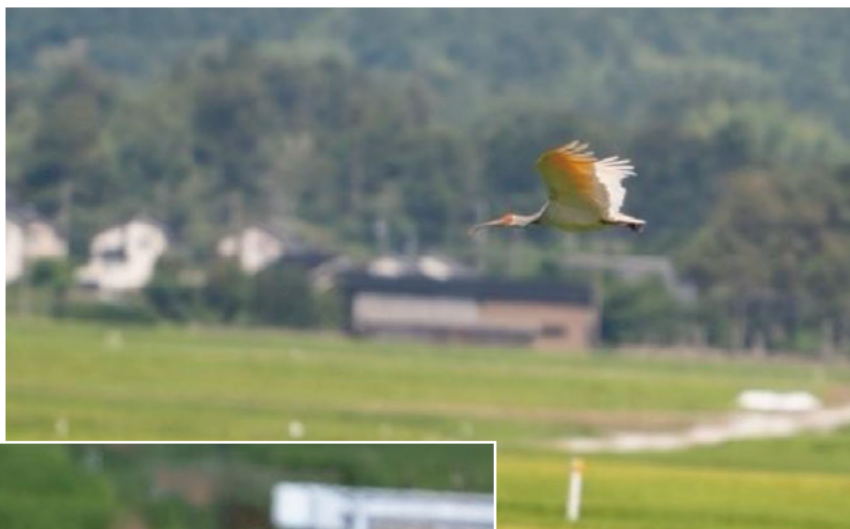
文責：(4)

こんにちは。問題なければ来年度長になるです。

海城生物部の展示にお越しくださり、ありがとうございます。

今年は各地で最高気温を記録する猛暑が続きましたが、皆さんいかがお過ごしでしたでしょうか。生物部員はそれぞれ興味のある生き物の採集や飼育に励んでくれたようです。

僕は個人で佐渡島の方に遠征してきたので、その時のことについて話そうと思います。佐渡市ではトキの保護と繁殖が行われ、現在では佐渡市中心部の田んぼに広く生息しています。今回の遠征では、7羽のトキを見ることができました。田んぼの脇の水路でミミズなどの生き物を食べているのが確認できました。トキは思っていた以上に人里近くで住んでいるのが印象的でした。今後も保護活動が続けられ、安定した生息が期待できると感じました。



※1



石坂産業

はじめに

石坂産業でのKSプロジェクトでは石坂産業でのリサイクル事業をフィールドワークで何日か通して体験し、自ら考えた提案を石坂産業さんにプレゼンするようなプロジェクトになっている。

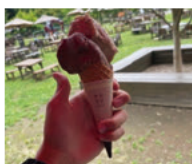
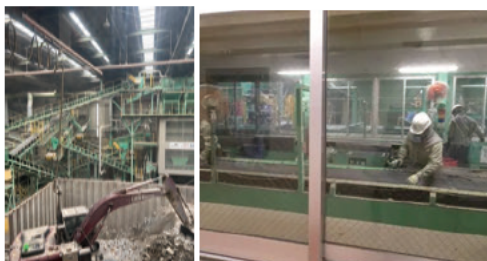
※ 2025 年 9 月 8 日現在も進行中

石坂産業とは？

大量生産・大量消費の一方的な社会から循環型社会へと転換させるべく、Zero Waste Design を理念として掲げ、再生可能な設計・ものづくりを行う社会を目指し、「ごみ」の概念をなくすために、産業廃棄物の処理、再生や自然の中での循環として里山再生などを行なっている会社。（石坂産業 HP より）

Day 1 (5/26)

石坂産業のプラントを実際に見学し石坂産業はどんな取り組みを行なっているかを学んだ。



翅の搾りかすを利用して作られたアイス
普通のアイスよりもっとりしていてエコで
美味しかった!!!



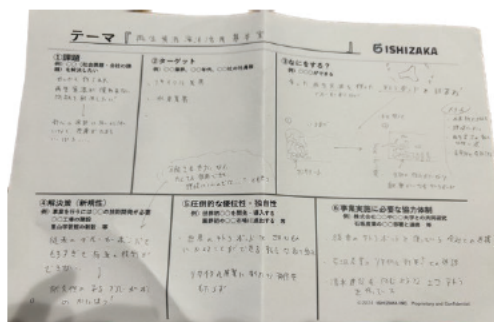
↑昼食に頼んだ石坂産業のお弁当
地元の野菜が使われていてとってもおいしかった! ()

Day 2 (海城にて)

前回学んだことを通して自分が石坂産業職員の中で興味を持った職業をアンケートで答えた。
筆者の場合はスマートプラント化についての研究職とリサイクル商品の開発部門位についての職業を選んだ。

Day 3 (7/15)

アンケートで答えたことをもとにグループ分けを行い、実際に石坂産業の職員との対話を通して自分の企画案を固めた。



↑実際に考えてみた企画案
石坂産業が作っているブルーカーボンを利用してテトラポットにして消費しようという構想。まだDay3までしか行っていないので構想が固まっていないがDay4で固めて最終日のDay5では満足のいく発表を行いたい ()

※1 石坂産業株式会社のロゴ。本稿は同社の関与・後援を示すものではありません。

ワークショップについて

主に石坂産業の工場の見学を通して、石坂産業の従業員の仕事内容に着目して興味を持った仕事についてまとめるということをグループワークの話し合いを通して行なった。

石坂産業での仕事は大きく四つあり、産業廃棄物処理工場での仕事、リサイクル製品の開発、里山での保全、これらの活動の宣伝に分けられる。

産業廃棄物処理工場では、運ばれてきたごみを査定する仕事やベルトコンベアで絶え間なく流れてくるごみを手作業で分別する仕事があり、目視できないほどの細かいごみはAIによる選別で補っている。特に手作業で分別する仕事には金属は色・音で、木材は繊維の質や可燃と不燃で即座に選別する技術が必要とされる。

リサイクル製品の開発では、再生砂や再生砕石に含まれる人体に害のある重金属を溶け出さないような工夫などを施し、それを使った皿などの製品を開発したり、海底に置くことで海藻の定着に利用したり、循環型社会の実現における“実際に社会に戻す”部分を担っている。そこには、社員がどれほど再生されたものを取り扱ってもらおうかという使い道の考察に尽力しているか、ということが窺える。

里山の保全では、定期的な間伐などの手入れはもちろんのこと、落ち葉を集めて堆肥として利用する落ち葉堆肥農法によって耕作地を管理し、オーガニックファームで栽培した野菜を利用したカフェやレストランにて販売することで、ここでも循環型社会の実現を目指している。活動の宣伝については、環境教育や自然と触れる体験などを通して特に次世代を担う子どもに循環型社会を少しでも知ってもらおうとしている。



引用：Qwert1234, CC BY-SA 3.0
<<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>>, via Wikimedia Commons



引用：Sphl - Photo taken by Sphl, CC 表示・継承 3.0 <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=756042> による

しかし、それぞれには循環型社会を目指す上での課題が存在することも明らかであった。産業廃棄物の中でも特に処理の難しい複合化廃棄物の処理方法の模索、再生された素材や里山で伐採された木材の使い道の拡大、保全活動の利益化などが主な課題であるとしていた。さらに我々はこれらの既存の仕事やその課題からそれを解決するための新しい仕事を提案するべく、実際に石坂産業に勤務している社員と対話を通して考えをまとめる、ということを行なった。筆者らは、生産技術開発部、資源化生産部、生物多様性推進室の他にも、新事業担当や広報担当の方たちと対話させていただいた。

筆者は商品開発においてリサイクルされると品質が落ちるものについてはどうすれば天然資源から作られた商品と市場で負けないのかということが気になった。そこで、再資源化製品開発に携わっている中島氏に話を伺うと、リサイクルにはいくつか種類があり、その中でリサイクルするたびに品質が落ちる方法をカスケードリサイクル、一度分解して不純物を取り除くことで科学的に天然資源と変わらない状態にする方法を水平リサイクルと呼ぶのだそう。この水平リサイクルが現実的な条件でできるようになれば天然資源と同等、否、再生された資源となるとさらなる付加価値によってさらに競争力が増すだろう、と筆者は考えた。

ちなみに話は変わりますが…筆者個人として一番興味を持ったのは、竹林内の環境について。

これらは環境の良い場所にのみ生息し、適切に管理されていないと見られない植物で、このような植物が当たり前のように見られるのは石坂産業のすごいところだなと思った。

最後に

このような環境教育を体験して、社会問題に取り組む社会人の姿を見て、自分がこれから生きていく未来について少し考えさせるようないい機会のなかったのではないかと筆者は思った。そして、このような機会をもらえたことには感謝あるのみです。

以上、石坂産業についてはここまでとなります。ありがとうございました。

知床研修

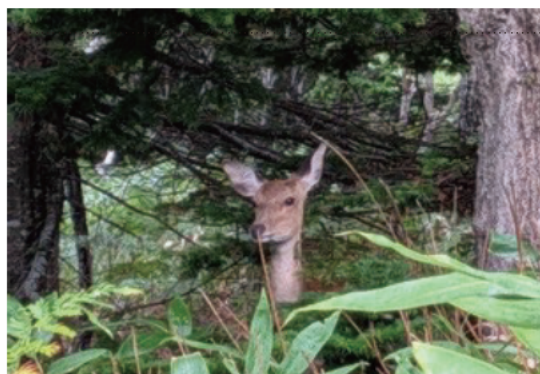


1 日目

am: 飛行機

pm: 遠音別サケ・マス遡上施設

11 時に羽田集合。飛行機に乗って、女満別空港へ向かいました。北海道は東京都とは違いとっても涼しかったです。その後バスで移動し、マス・サケ観察をしに行きました。途中の休憩所では、オオセグロカモメを観察することができました。目的地である遠音別サケ・マス遡上施設に到着しましたが、温暖化の影響により遡上している個体数は少なくなっていました。それでも観察中には、エゾシカやオジロワシを目にすることができました。ホテルは“hotel 知床”という斜里町ウトロの中にあるホテルでした。ウトロはヒグマやエゾシカなどの野生動物と人里を分けている場所であり、人里は電気柵で覆われていました。夜には、海城 OB の葛西さんからクマと遭遇した時の対応の仕方などについての講習をしてもらいました。



↑ エゾシカ



↑ 知床五湖のうちの一湖

2日目

am: 知床五湖

pm: イワフジツボ観察 / 堤防での灯火採集

2日目は、あいにく雨となってしまいました。

午前中は知床五湖に向かい、高架木道を歩きました。ここは、知床五湖のうちの一つの湖を見るコースで、オオルリボシヤンマなどのトンボやアマツバメやトビなどを観察することができました。知床五湖を全て回ることができる地上遊歩道は先日、クマが出たため封鎖されていました。普段こちらのコースは入場制限が設けられており、事前にレクチャーを受けた人のみが入ることができます。例えば、飲み物はお茶か水に限る、食べ物はジップロックに入れて持ち運ぶ、といったルールがあり、人間の食べ物の味をクマに覚えさせないよう対策が取られています。

また、クマが出没した場合には調査が行われ、安全が確認されてから立ち入りが再開される仕組みになっているそうです。その後は近くの林道を散策し、エゾシカやノスリなどを観察することができました。

3日目

am: 知床峠

pm: 羅臼町

この日は斜里町から見て半島の反対側にある羅臼町から船に乗るため、比較的早めにホテルを出ました。まずはじめに知床峠に寄り道をし、ギンザンマシコという真っ赤な鳥を探します。知床峠は標高が700mほどしかないのですが緯度が高いため、関東では高山域でしか見られないハイマツ林が広がっていました。しばらくギンザンマシコがいなかったのですが見つかりません。その時です。急に葛西さんに下がるように言われました。葛西さん曰く熊がいたということです。安全な場所まで全員が下がった上で、超望遠レンズで覗いてみると、見えました。それも子連れです。すぐにバスが僕らの目の前ま

で移動してくれて安全に乗ることができました。先日の事故の後でしたので怖かったでしたが、全員が葛西さんのレクチャー通りに安全に動くことができていました。その後羅臼町に到着し船に乗船。約2時間半のクルーズです。まず最初に見ることができたのはクロアシアホウドリ。はじめのうちは大興奮してシャッターを切っていたのですが、あまりにも数が多くて最後の方になると誰もカメラを向けていませんでした。次に見ることができたのはマッコウクジラ。何回か潮を吹いた後、大きな尾鰭を見せて沈んでいきました。ちなみに知床までくるのはオスのマッコウクジラだけでメスはもっと南の地域で一生暮らしているそうです。その次に見ることができたのはアカアシミズナギドリ。飛んでいる姿は一見似ているのですが、よく見てみると全然見た目が違うことがわかりました。クロアシアホウドリと比較するとそこまで数多くは見られませんでした。最後に見られたのがイシイルカ。何回か群れに遭遇することができ、たまに特徴的な背中のコブも見られました。ギンザンマシコが見られなかったのは残念でしたが、とても内容の濃い1日であつという間に過ぎてしまいました。



ヒゲマ【超望遠】



クロアシアホウドリ 離水



マッコウクジラ 潜航

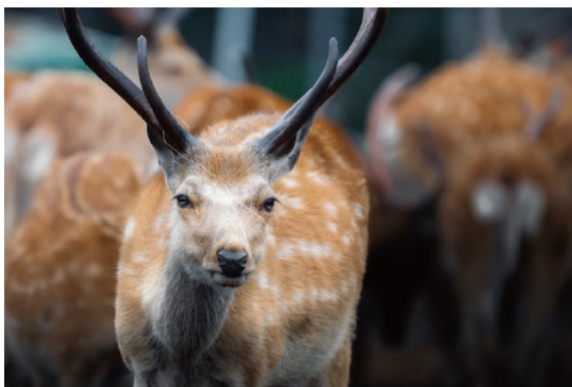
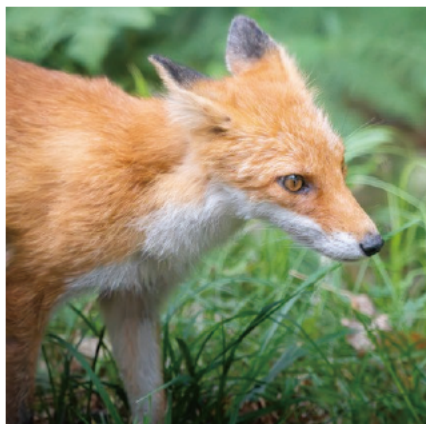
4 日目

am: 飛行機

pm: 遠音別サケ・マス遡上施設

最終日はまずはじめにオジロワシを観察しました。海岸線を歩きながら探していると木の上に止まっているところを見つけることができました。めっちゃ格好いいです。その後すぐにエゾシカファームというところに見学に行き、北海道における獣害対処について学ぶことができました。その後バスに乗りしばらく揺られ、網走市にある大曲湖畔園地に到着しました。ここでもオジロワシを観察する予定だったのですが残念ながら見つからず。代わりにハイタカが見られました。そうこうしているうちに飛行機の時間が近づいてきたため、名残惜しいですがバスに乗り空港に到着しました。もっと知床にいたかったという悲壮感が漂う中、機内から着陸直前に見ることができたのが下の写真。何の写真かわかりますでしょうか。そう、海城が見えたんです。一気に帰ってきてしまったことを実感させられてしまいました。みんな一斉に写真を撮っていました。

学びに溢れ充実した3泊4日を知床で過ごすことができました。合同会社ワイルドライフプロの葛西さんはじめ、今夏の合宿をサポートしてくださった関係の皆様に御礼申し上げます。



魚班

文責： (5)

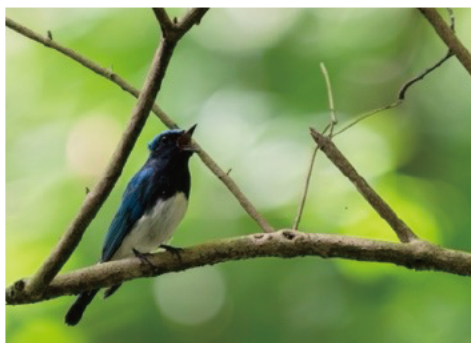
はじめに

こんにちは。魚班班長の高木です。

長いようで短かった僕の生物部ライフも今年で最後。そして同時に、日淡（日本産淡水魚）をメインとした魚班も今年で終わってしまいます。現在魚班は生物部で最大の班でありながら、日淡を専門とする古き良き班員がほとんどいません。釣りや海水魚が好きなやつばかり。（老害の戯言です。気にしないでください。）

その理由は明白、僕が野鳥に浮気して観察会をしなくなったから。来年には魚班の展示も釣りや海水魚に関するものがほとんどになっていることでしょう。

流石にこのまま引退するのはOBの方々へ申し訳ないので、最後くらい日淡への愛を語って終わりにしようと思います。皆様、オタクの一人語りに少々お付き合いください。



↑鳥はいいぞ！



↑カジカの若魚

日淡の魅力

初級編

いきなりギヤをあげて説明すると引かれるので、まずは段階を踏んで語っていきましょうと思います。

まずは初級編。一般の方々にもわかりやすい日淡の魅力といえば、美しい婚姻色が挙げられるでしょう。代表例はオイカワやカワムツ、ウグイ、タナゴなど。これらの種の成熟したオスは繁殖期になると青や赤、橙など様々な美しい体色を纏います。その美しさは熱帯魚にも引けを取らないレベル。でも一部の人はこう思うかもしれません。「婚姻色なんて一時期だけじゃん」と。確かにその通り。婚姻色は一年の限られた期間だけ、それもオスだけに現れます。

でもね、だから良いんです。わかりやすい表現で言うならギャップ萌えというのが正しいでしょうか。普段は銀色で地味なやつが、ある時期になると美しくなる、そこが日淡の婚姻色の魅力です。

この時点でキモいと思われた方、安心してください。まだ初級編です。



↑オイカワ



↑カワムツの若魚

中級編

さあ中級編。ここでは日淡の地味な美しさについて説明しましょう。

皆さんは一度は侘び寂びという言葉聞いたことがあると思います。日淡の地味な美しさはまさにそれです。枯山水の庭のような美しさが彼ら日淡にはあります。例えばモツゴやトミヨなどが挙げられます。

彼らが沈水植物の豊富な湧水の池で泳ぐ姿を見れば全米が感動して泣くことでしょう。

上級編

最後に分類がよくわからない種と生存競争が弱い種の魅力に関して説明していこうと思います。正直今から書くことは一般の方には絶対に理解してもらえないのでわかりやすさは度外視でいきます。もし理解できる小学生の方がいらっしゃったら、ぜひ海城に入って生物部に入学してください。確実に魚班長・部長になれます。



はじめに分類がよくわからない種の魅力について、例えばクロダハゼなどが挙げられます。

こいつの分類は元々ヨシノボリの一種なのにクロダハゼと呼ばれていた種がトウヨシノボリに統合され偽橙色型となった後に、様々な研究を経てもう一度クロダハゼとして独立したという極めて変な経歴を持ちます。さらに分布についても図鑑などでは関東全域とされているものの検証済みなのは東京都と神奈川県だけであり、北関東は未検証とわからないことが多いです。さらにこれは僕の体感ですが東京と神奈川の河川ならどこでもいるというわけではなく、トウヨシノボリと棲み分けているような気がしないでもありません。とにかく色々わからないんです。そして僕のような一部の日淡オタクはそこに惹かれるんです。理由は説明しません。説明しても理解してもらえないのは相当難しいし、自分でもよくわかんないから。

次に生存競争に弱い種について。これはシナイモツゴなどが例に挙げられます。シナイモツゴは元々東京以北の用水路などに普通に生息していた魚でした。昔の文献などにあるクチボソという記述はほとんどがこいつです。しかし明治以降にモツゴが持ち込まれたことで生存競争に負け、東北や北海道の一部の個体群を除きほとんどが絶滅しました。現在は野生絶滅の一手手前である絶滅危惧IA類に分類されています。

これだけだと、「ただ珍しい生き物が好きなだけではないのか」と思われるかもしれませんが違います。理由は先ほどと同様に、説明しないし自分でもわかんないです。

とにかく良いから良いんです。

最後に

ここまで最後まで読んでくれた方におすすめの図鑑を紹介したいと思います。山と溪谷社の「日本の淡水魚」という図鑑です。この図鑑はコンパクトでありながら、写真が載っており採集時の同定などにとても重宝します。ついこの間に新版が出たばかりなので助法も最新版です。ぜひ、この項を読んで日淡に興味を持ったという方は買ってみてください。

虫班

文責: (4)/(3)

高校副部長をしているです。班長になって2年ほど立ちますが、最近は昆虫観察よりも鳥観察の方がメインになってきてしまっています、、こんな僕がむし班の部誌を書いてもいいものかと思いますが、提出期限が今日ということなので、書いていきたいと思います。

活動 ()

虫班では、飼育がメインとなっています(班としての採集はあまりできていませんが、合宿などで様々な昆虫を見ることができます!!!)。

現在、虫班ではコクワガタ、ニジイロクワガタ、ヘラクレスオオカブトなどのクワカブたちと、クロオオアリ、ズアカオオアリなどのアリも飼育しています。まず、クワカブのところから話すと飼育にも色々あって、**産卵**、**幼虫飼育**、**成虫飼育**などがあります。成虫飼育はとってきたり買ってきたりした昆虫に餌をあげるだけです(餌やりサボる班員いて困ります)。幼虫飼育は、カブトムシだったら、発酵が深いマットを与え、クワガタだったら発酵が浅いマットや菌糸瓶(木の屑に菌糸を巻きつけたもの)などを与えるだけです。幼虫期間は種類によって大きく違う(3ヶ月から数年まで様々)ので、そこら辺のことも考えながら飼育を進めると楽しいです。産卵は、カブトムシは容器を用意したら、マットを詰める面積の3割を硬く詰めて7割をふわふわとのせます。クワガタも同じく、3割を硬く詰めたら産卵木(クヌギとかコナラです。専門店に行けば売ってます。)を入れます。産卵木は必ず加水を忘れないようにしましょう。残り7割は先ほどと同じです。そして、メスを入れたら2、3ヶ月くらい待って卵や幼虫をとることができます。生物部では、昨年ヘラクレスの産卵に成功していて、現在幼虫が結構育っています。

次は、アリについてですが僕はあまりアリに詳しくないので、中3の に詳細は聞いてください。僕が知ってることは、アリはわざわざ産卵セットを組まなくても卵を産んでくれることぐらいですかね。

アリ日記 ()

働き蟻の体の大きさ

アリの巣を眺めていると1匹1匹微妙に体の大きさが異なっていることがわかる。これは幼虫の時にどれだけ餌を貰ったかで成虫の大きさが変わるからだ。なので餌が乏しい出来立てのアリの巣の働き蟻は同種とは思えないほど小さい。

では、限界まで幼虫にたくさん餌を与えると無限に大きくなりそうだがそうではない。実は限界まで餌を与えられると羽が生えて新女王蟻になるのだ。なので新女王蟻は餌が豊富にある栄えた巣でしか生まれてこない。逆に言えば新女王蟻が生まれてくればその巣は繁栄している証拠になるのだが、残念ながら生物部のアリの巣からはまだ新女王蟻は出てきたことがない。

アリにとって「ベスト」な餌

アリ飼育において一番悩ましい（めんどくさい）のは動物性の活餌である。ご存知の通りアリは小型のものが多く、大きな昆虫などをあげてしまうと死んでしまう蟻がいたり、解体するのに時間がかかって餌場が臭くなったりする。なので僕はミルワームという餌用のワームを繁殖させて生まれたばかりの小さいミルワームを与えてきたが、最近「ベストワーム」というものがアリ専門店のサイトで売られ始めた。

ベストワームはミルワームより小さく、ヒラタコクヌストモドキよりボリュームミーなので数がある程度増えてきたアリの巣の活餌に最適だそう。なので試しに自費で購入し、アリにあげてみるととても扱いやすい大きさで、アリ達が一生懸命群がって食べていた。今繁殖させているがある程度増えてきたら生物部に持っていか検討している。



ミルワーム

ミヤマ採集 ()

今日(7月27日、部誌の提出日)、高尾の某所に昆虫観察をしに行ったのでその時のことを書いていきたいと思います。以前、高尾方面でもミヤマクワガタが採れると聞いたので今年の夏、高尾で昆虫観察や他の生き物観察(鳥観察)をしつつ、ミヤマを狙うことにしました。朝早く行っても良かったのですが、少々面倒だったので午前8時頃に高尾駅に到着しました。

そこから、目的地まで行ったのですが、ウスバカミキリやモンキアゲハなどどこにでもいるような種類しか見つかることしかできませんでした。そして、一本のカエデの木の枝先にクワガタらしきものがついているのが見えたので、つついて落としてみると、ノコギリクワガタだった。

今日、初クワだったので嬉しかったのですが、大きさは47mmとやや小さかったです。その後何匹かクワガタを見つけることができましたが、ミヤマクワガタを見ることはできませんでした。その後、太い木の幹の高いところにクワガタらしきものがついていたので、望遠レンズでのぞいてみたところ(鳥観察も兼ねていたので、持ってきていました)、ミヤマの雄でした。その高さは6m程度上だったので、虫取り網で届くわけもなく諦めかけていましたが、なんとかとることができました。(採り方は容易に想像できると思いますw)

その木からは、他にも5匹程度のノコギリをとることができました。木の根本には、大量のミヤマやノコの死骸が転がっていました(カラスやフクロウの仕業でしょう)。その後、川沿いを歩いて鳥観察をしましたが、夏鳥らしきものを見ることはできませんでした。キビタキの鳴き声が聞こえた程度です(鳥班の班紹介でかけや)。また、昆虫の方もミヤマカラスアゲハ見たいのが飛んでいくくらいでした、そんな感じで、僕にとっては今年初のクワガタ採集になりましたが、ミヤマが取れたので満足です。しかも、そのサイズが68.1mmと僕が採集したなかで一番大きな個体になりました。来週から佐渡島の方に遠征に行くので、その時のことはポスターに描きたいなーって思っています。

最後に、ミヤマクワガタの顎形の地域差についてちょっと書いて終わりにしたいと思います。



(撮影地と最終地は違います)

◀ 今回僕が高尾でとってきたデカミヤマです (僕にとっては)。顎の形に注目すると、The 富士型ですね。富士型とは、第一内歯が大きく発達しているタイプです。

右のは、僕が今回とってきたミヤマ (68.1mm)、左は知り合いが北海道でとってきたミヤマ (69.5mm) です。この画像をよく見てみると、左の方は第一内歯があまり発達していない代わりに、二股部分がしっかりと分かれているのがわかります。The 蝦夷型ですね〜 こいつらの中間が基本型なのですが、画像がなくてすみません、、、

ミヤマって細いイメージあるけど 68mm 超えと、ゴツく見えるなあ



このように、地域によって顎の形が変わる理由として、幼虫期間の温度のちがいが挙げられています。そこらへんに注目しつつ、今後ミヤマ採集と飼育していきたいと思います。

最後と言ったのですが、もう少しだけ書かせてください、今年初めてチョウの標本をつくり始めました。トンボはちょっと前から作っていたのですが、チョウは本当に作るのが難しいです。

逗子でとってきたミヤマカラスアゲハです。羽が欠けているところもありますが、最初の個体なので、仕方ないでしょう。夏型ですが、とても綺麗でした。今見ると、触覚の部分が雑すぎますね。あとで修正します。こういったことも含め、後輩には伝えていければなと思っています。

以上、虫班でした



元 奇蟲班 (虫班所属)

文責: (3)

奇蟲について

かつての最大勢力だった奇蟲班も今や虫班の中の一つとなった奇蟲ですが、そもそも奇蟲とはなんだったのでしょうか。奇蟲の定義については、一般的にはタランチュラ、ムカデ、サソリといった節足動物や、カタツムリ、ヒル、カギムシなどを中心とした陸上の変わった見た目の小動物を指すとされていますが、生物部では定義が曖昧で、とりあえず今飼っているのがムカデとタランチュラなのでこの二つが最低限奇蟲と思っていただければいいです。(本当は蟹とかも奇蟲なはずなのだけど死んじゃいました)



アオズムカデ

ムカデの捕獲の仕方

タランチュラとかムカデとかどーやって捕獲するのと思った人いるかもしれません。結論を言うと今飼っている奇蟲の半分は買っています。タランチュラは日本には生息してなく、ムカデも海外の方が一部を除き迫力があるため海外のものを求め、海外に行き捕まえるのは無理なので買うのはしょうがないです。(ちなみに今飼っている海外産の奇蟲は全部中南米産)

しかし、蟹やムカデは捕獲したものもあります。そこでこの後日本にいるムカデの捕獲の仕方について書きます

ムカデの捕獲

ムカデの捕獲が怖いと思っているかもしれませんがやってみると難易度は思ったより低いです。

1. 道具を準備する、出やすい時期に探す

まず、どの生き物を捕まえるにも道具が必要です。道具を準備しましょう。

必要な道具：採集容器、長いトンダ (火バサミなど)、手袋 (念の為)

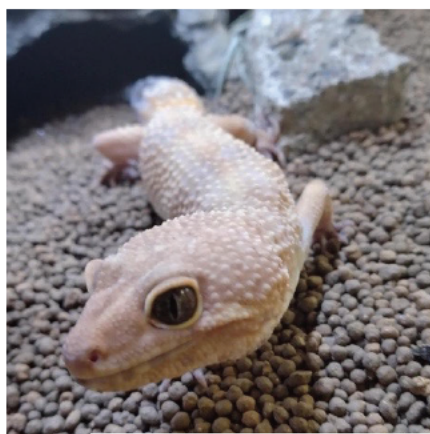
ムカデは基本夜行性ですが、6月頃は繁殖期で外にいるためおすすめです。

2. ムカデを長いハサミで掴み容器にしまう

ムカデを見つけたら、長いハサミで掴み容器にしまいましょう。容器は蓋があるのがベストです。同じ容器に2匹以上ムカデを入れるとムカデが共食いするので注意しましょう。日本の本州に主に生息しているのはアオズムカデかトビズムカデです。(同定の仕方はネットでググりましょう)

爬虫類、両生類班

文責： (3)

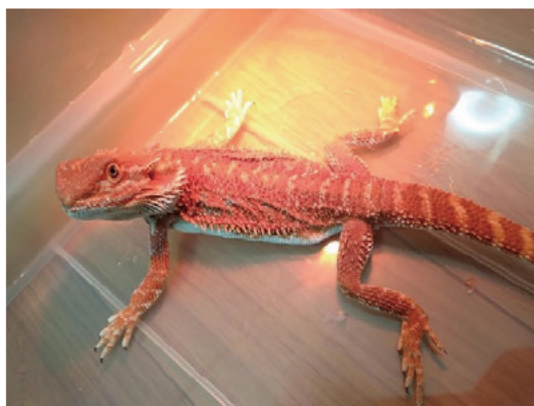


1、班長紹介

どうもこんにちは。ある先輩に班長を押し付けられてしまった(去年度のことです)3年の小島です。好きな生物はアリです。「えっ」って思った人がいると思いますがアリが好きすぎて歩く時はいつも下を見てアリが歩いていないか探しているぐらいです。もちろん爬虫類、両生類も好きで、家でヒョウモントカゲモドキやカメレオンなどを飼っています。まあこんなやつが班長をしています。



ネペンテス・アンプラリア (ツボウツボカズラ)



2、爬虫類、両生類班の活動

自己紹介はここまでにして簡単に爬虫類、両生類班がどんな班なのか説明していこうと思います。主に**爬虫類**、**両生類**の飼育を行っています。飼育している生き物はこの後に一年生が紹介してくれているのでそちらを参照してください。爬虫類班に入れば、例えば**親が嫌い**で飼えない、または**値段が高くて**飼えないと今まで諦めていた爬虫類、両生類の飼育に携わることができます。なので、そこのあなたも爬虫類、両生類班に入ろう！少し、宣伝を挟みましたが他にも毎年トウキョウサンショウウオの卵囊の調査に行っています。(爬虫類班の活動ではなく部全体の活動です。)

3、書くことないからレオパの繁殖について

大体ここまでで班紹介自体は書くことがなくなってしまったので夏休みに挑戦したレオパの繁殖について書こうと思います。

まず、レオパとは学名「*Eublepharis macularius*」、和名ヒョウモントカゲモドキといい、飼育が容易なことからペットとして人気が高いトカゲ（正確には地上性ヤモリ）です。ちなみにさっきから言っている「レオパ」は英名「Leopard Gecko」から簡略化した呼び名です。

生物部では長いことこのレオパを飼育していて、昔も繁殖に挑戦したらしいのですが失敗したそうなので今年に挑戦することになりました。

レオパの繁殖には「クーリング」と呼ばれる段階を踏むのがポピュラーとされています。

クーリングとは飼育温度を徐々に下げて、餌を与えずに数ヶ月過ごさせることでレオパに冬を擬似体験させるものです。そうすることでレオパが発情しやすくなり、繁殖成功の可能性が高くなります。

しかし、そんな面倒なこと僕はやりません。理由はめんどくさいから。「そんなことしなくても繁殖できるでしょ」とたかをくくり、繁殖に挑戦しました。（ちなみに今生物部にいるレオパはメスで相手がいなかったのが僕が飼っているオスのレオパと繁殖させました。）

一旦オスをメスのケージに入れるとメスをぺろぺろ舐めて尻尾を激しく振る動作をしました。これは発情している証拠です。

しかしメスは嫌そうにすぐ逃げてしまいました。本当ならこの時にオスがメスに噛みついてそのまま交尾するはずなのですがうちのレオパの気が弱いのか、メスとの相性が良くないのかその後も何回かオスが発情しても一向に交尾に至りませんでした。なので一週間ほど同居させてみました。

実はこの記事を書いているのが同居させている時なので繁殖が成功したかは分かりません。

（今の時点で交尾を確認できていないので）

文化祭の時にはわかっていると思うのでぜひ生物部の展示をじっくり見てみてください。



4、最後に

ここ（生物部）はある程度自由に生き物を愛でることができる環境です。だからこそ、いま好きな生き物だけでなくあんまり知らない生き物のジャンルにも興味を積極的に持って視野を広げていってほしいです。なので海城に入ったらぜひ生物部の爬虫類、両生類班に入って、ここでしかできないような素晴らしい経験をしましょう！こんな感じで爬虫類、両生類班の紹介を終わります。



バイバイ～！

鳥班のブシ

文責： (5)

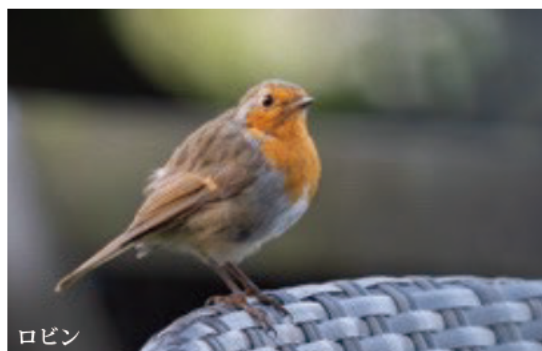
⚠ 注意 このページをお読みになる前に必ずご確認ください。

- ・ここでは延々とカメラについて語られますが、これはれっきとした海城生物部鳥班の紹介文です。安心して最後までお読みください。
- ・このページは班長がオタク心を自制できず思うがままに書いてしまったため、初心者の方には少々難しい内容となっております。ご不明な点がある場合はお近くの部員までお声がけください。恐らく班長以外答えられません()
- ・ここに書いてある内容は全て班長の私見に基づく個人の感想です。
- ・いつもより早めのペースで読んでみてください。オタクが実際に喋っているのを聞いているみたいになります。

鳥といえば野鳥観察、野鳥観察といえばカメラ。ということでここでは近頃のカメラについて、生物部屈指のカメラオタクである鳥班長が延々と語っていきましょう。どうぞお付き合いください。

カメラのセンサーについて

まずはカメラのセンサーについて。近年センサーを高画素化する傾向が進んでおり、低画素機と呼ばれていた機種は2400万画素から3000万画素へ、高画素機は4500万画素から6100万画素へと増えています。多くの方はこれについて、トリミング耐性が上がるから良いのでは？と思われるかもしれませんが、これについて僕は画素数は維持して高感度耐性に振るべきではないかと考えます。正直トリミング耐性と高感度耐性のどちらを必要としている人が多いのか考えると、高感度耐性の方が圧倒的に多いのではないかと思います。高画素機については元々画素数を求めて購入している方がほとんどでしょうから高画素化は良いのかもしれませんが、2400万画素台の低画素機や1200万画素台の超低画素機については高画素化するべきではないと思います。ちなみにこれはフルサイズセンサーにおける話ですが、APS-Cセンサー



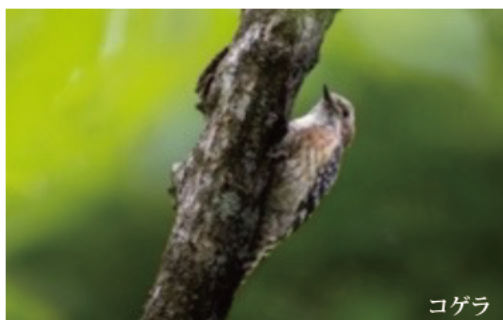
↑一応鳥班の記事であることを伝える用のロビンの写真

の場合はさらに話がシビアになってきます。APS-C機の2000万画素というのは $2000 \times 2.25(1.5^2)$ よりフルサイズ換算で4500万画素相当の高画素機となります。にも関わらず近年の一部のAPS-C機には3000万画素や4500万画素のセンサーが搭載されており、ちょっと高画素すぎるのではないかと僕は思っています。また高画素機では画素ピッチが狭くなることでブレにも弱くなります。せめてそのような機種を出すのであれば、従来と同様の画素数の機種も出した上であるべきではないでしょうか？

ちなみにこの文は一応鳥班の紹介というこ

とですので、野鳥撮影の観点から一番自分が求めるセンサーを上げるとすると、クアッドピクセルの6400万画素裏面照射積層型センサーが欲しいです。

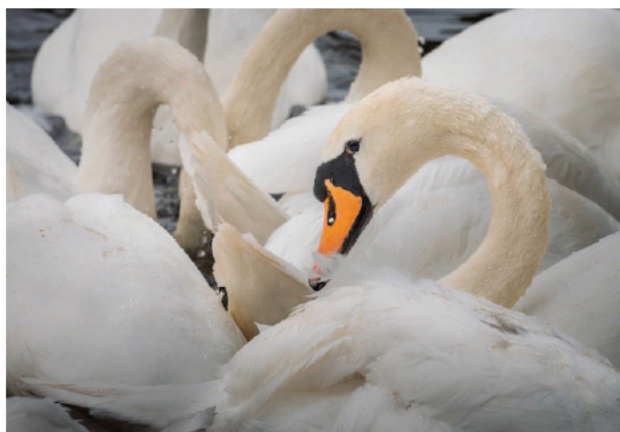
今の技術で実現可能かは分かりませんが、通常時はフルサイズのクアッドピクセル1600万画素センサー、または通常の6400万画素センサーとして運用、APS-C クロップ時は通常の2840万画素センサーとして運用、MFT クロップ時は通常の1600万画素センサーとして運用ということをする事で、高画素機でありながら超低画素機としても使用できる夢のカメラが誕生するのではないかと妄想が膨らみます。恐らく万が一実際に発売されても高すぎて買えないでしょうが。



コゲラ

レンズについて

次にレンズについて。一応この文は鳥班の紹介らしいので(2回目)今回は超望遠レンズに限ってお話ししたいと思います。僕が欲しいレンズは2種類。高級超望遠ズームレンズとテレコン内蔵軽量超望遠単焦点レンズ。まずは高級超望遠ズームについて。現在、各社で150-200mm程度を広角側とし600mmをテレ端とする超望遠ズームレンズが発売されています。が、それらはほとんど各社の通常ラインでの発売となっており、高級ラインで発売されているものはごく僅かしかありません。私の希望としてはスーパー UD レンズや各社の開発しているレンズコーティング技術などを搭載した高級超望遠ズームレンズを発売してほしいです。次にテレコン内蔵軽量超望遠単焦点レンズについて(名前適当に作っ



ただどなんか強そう)。

現在各社で400mmF4.5や500mmF5.6といった軽量超望遠単焦点レンズが発売されています。しかしこれらのレンズのどれもテレコンを内蔵しているものは無く、600mmF4のような各社の最上級高級レンズに搭載されるのみにとどまっています。ここで軽量超望遠レンズに内蔵テレコンを導入することで、例えば400mmF4.5のレンズならばAPS-Cクロップなどと合わせると400mm、560mm、600mm、840mmの実質ズームレンズが誕生します。それも単焦点の画質で軽量なものが。もしこれを読んでいる方にレンズ開発に関わっている方がいらっしゃいましたら、ぜひ開発をお願いします。

哺乳類班

文責：(5)/(6)

今年から鳥班に吸収合併された哺乳類班。本当は鳥班長である僕が書くべきだったのですが、哺乳類の知識は無いし、とにかく色々めんどくさいので、去年の偉大な先輩がお書きになられた(二重敬語)とても素晴らしい文章をそのままコピペします。どうぞお読みください

1. 挨拶

班設立からなんだかんだで4年。いろいろあって今まで部誌に姿を表さなかった哺乳類班ですが、この度ついに紹介ページをかけることになりました、どうも班長の小栗です。ただ如何せん弱小なものでページ数はあまり割けず、皆様とも1ページの仲となってしまうので

くれぐれも読み飛ばさないように、何卒。

2. 概要

本班では、哺乳類の中でも飼いやすとされているマウス等の小動物や、タヌキやアライグマなどの死体(拾ってきたり提供されたり)の標本作成を中心に行っています。現在もタヌキの皮標本を鋭意製作中であり、文化祭では自作のものを皆様にお見せできる予定となっております(執筆日:7/14)今後も進化を続けていく予定ですので、暖かく見守ってください。

3. 現況報告

現在哺乳類班では実験用マウスを十数匹飼育しており、過度な繁殖を防ぐために♂♀で飼育ケージを分けて飼育しているのですが、その様子を観察しているだけでもなかなか面白いものがあり、



今後その修正を生かした実験や研究を後輩のみんながしてくれたら嬉しいなと思っています。

3. 最後に

こういう可愛い哺乳類たちに心惹かれた君、是非哺乳類班にどうぞ！
僕らは君たちを歓迎するぞ！

それでは、上がってもらって結構！(fin)

植なま (植物班)

文責：  (4)

部誌の編集長です。

正直に告白します。植物班のページ、書いてる時間がありませんでした。

というわけで、大変心苦しいのですが、昨年度の部誌を要約したものを掲載し、活動報告とさせていただきます。来年はちゃんとした記事が載ることを祈りましょう。

はじめに

この記事を読んでいるあなたは、きっと生物に多大な興味があることでしょう。

しかし悲しいかな、我々生物部の中でも植物班の人気は今ひとつ。どうしても動物や昆虫の派手さに目が行きがちです。ですが、道端でたくましく生きる植物に目を向けたことはありませんか？植物に愛を感じるその君、ぜひ植物班の扉を叩いてみてください。

1. 植物購入会

OZAKI FLOWER PARK にて、各自が栽培したい植物を購入しました。部費で買える（※限度額あり）ので、経済的な負担なく始められるのがポイントです。

このイベントの目的は、単なる買い出しではありません。「せっかく入班してくれた部員の植物愛を高めること」「班員の幽霊部員化を防止すること」という、班の存続に関わる重大な使命を帯びていました。

2. 栽培植物について

昨年度は、オリーブ、サルビア、ひまわり、スイカ、ズッキーニ、メロン、トマト、アジサイ、ブルーベリー、キウイ、モモ、オクラ、レモン、ゆず、パッションフルーツ等々、非常に多くの植物を栽培していました。

3. 観察会について

近所の戸山公園や小石川植物園、等々力溪谷などに出かけ、野草（雑草含む）の同定を図鑑片手に行いました。栽培も植物班の活動として重要であることは間違いないですが、この活動もまた非常に重要なものです。

(注釈)

ちなみに、上記で紹介した植物たちですが、4号館の改装工事の際に我々の許可なく全て処分されてしまいました。諸行無常。

さらに、今年度新たに買い直した植物たちも、この夏の記録的な猛暑と栽培場所の環境の悪さというダブルパンチにより、驚異的な生命力を見せつけたメロンとオクラ以外、すべて枯れ果てました。

来年こそは、緑あふれる植物班が復活することを祈るばかりです。我こそはという救世主の入部を、メロンとオクラと共に心よりお待ちしております。

飼育生物紹介

ギラファノコギリクワガタ *Prosopocoilus giraffa* (虫)



世界最大のクワガタ。特にフローレス産の個体が大きくなりやすい。最大では雄で 118mm。国産のノコギリクワガタの 1.6 倍近くある。生物部にいるギラファノコギリクワガタの体長は 108mm と大きい。

ヘラクレスオオカブト *Dynastes hercules* (虫)



世界最大のカブトムシ。13 亜種に別れている。一番大型になりやすいのがヘラクレス・ヘラクレス (原名亜種) で 181mm。また、前翅の色は湿度によって決まる。乾燥していると黄色になり、ジメジメしていると黒褐色になる。生物で飼育しているのも原名亜種だ。今年の 2 月に産卵セットを組んで現在幼虫が 20~30 匹程度いる。

ニジイロクワガタ *Phalacrognathus muelleri* (虫)



ニジイロクワガタはその名の通り、玉虫色 (構造色) の体をもつクワガタで、オセアニア原産だが日本のカブトムシと同じか少し大きいぐらいの大きさ。その輝きから世界一美しいクワガタと言われ、寿命も長めで丈夫なのでペットとしての人気も高い。ちなみにこのクワガタは足で掴まれると結構痛い。(経験アリ)

コクワガタ *Dorcus rectus* (虫)



日本で 1 番、メジャーで取りやすいクワガタ。その小ささや飼いやすさ、寿命の長さから人気がある。オスだと、40mm 行けばまあまあで、50mmUP になるとコクワガタとは思えないような迫力が出てくる。メスは産卵する時に産卵マークを残すことから、野外でも朽木を見ると産卵しているかどうか分かる。野外でも越冬するため、飼育するときは常温でも OK。

オオクワガタ *Dorcus hopei binodulosos* (虫)



国産の中でも人気のあるクワガタ。別名「黒いダイヤ」と呼ばれる通り、野外で採集するのは難しい。生物部では、60mm くらいのオオクワガタのオスを数匹飼っている。80mm、90mm の化け物個体になってくるとアンバランスになってしまうのであまり筆者は好みではない。60~70mm の間が一番バランスはいい。

カブトムシ *Trypoxylus dichotomus* (虫)



一度は誰でも飼ったことがあろう一般的な甲虫。その特徴は言うまでもないだろう。小学生には人気だが、個人的には中学生にもなると、クワガタに比べてエサを大量に消費するわ臭いわで良い印象を持たなくなってくるものだ。(生物部でも飼っていない)

ノコギリクワガタ *Prosopocoilus inclinatus* (虫)



都心でもクヌギ林に行けば簡単にとることができる。小型のものと大型のもののアゴの形は大きく異なる。また、赤みがかったものから黒いものまでいて、色にも個体差が大きく生じる。オスは 60mm あれば大きい方で、70mm を超えてくると迫力がさらに増す。野外では越冬はしない。

クロヤマアリ *Formica japonica* (虫)



主に日本全土に生息しており、公園などで普通に見られる。体色は灰色がかった黒色。中型で巣の中に女王が複数いる多女王の巣と女王が一匹のみいる単女王の巣がある。結婚飛行は東京では主に 6 月から 8 月で道に女王蟻が歩いていることが多々ある。生物部では部員が作成した石膏でできた巣で飼育しており、約 200 匹いる。自然界では数千個体になることもある。

オオズアリ *Pheidole nodos* (虫)



主に関東以南の地域に生息しており、公園などで普通に見られる。体色は胸部と足は赤褐色で頭部と腹部は暗褐色である。小型で巣の中に女王が複数いる多女王の巣と女王が一匹のみいる単女王の巣がある。体感的に多女王の巣が多いように感じられる。この蟻の大きな特徴は「大頭蟻」と書くように兵隊アリが体に比べて頭が異様に大きいことである。この大きな頭で大きな餌の解体、運搬などを行う。

生物部のオオズアリはインターネットで購入した石膏巣で飼育しており、大体 400 匹いる。

コハクオオアリ *Camponotus fedtschenkoi* (虫)



中央アジアに広く生息する中型のオオアリ属のアリで、やや黄色がかった美しい白色、透明感のある白い体色が特徴。

日本には生息していない体長は女王アリで 12 ～ 14mm、働きアリは 5 ～ 14mm。働きアリは大きくなるにつれて頭の色が濃くなるという特徴がある。1 匹の女王から最大数千匹のコロニーへ発展することもある。そんな、コハクオオアリは雑食で、甘い蜜は大好物。また、コハクオオアリは冬眠を 11 月～ 2 月末頃までする。3 月下旬に産卵をし、産卵数は 10 数個である。

ズアカオオアリ *Camponotus singularis* (虫)



東南アジアに生息している大型のアリ。

女王アリは 20mm を超え、日本のアリが可愛く見える。生物部では購入したものを飼育しており、昆虫ゼリーなどをあげている。

アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster* (爬 / 両)



北海道や南西諸島を除いてほぼ全国に生息。水田や池、小川など湿っているところにいる。因みにアカハライモリは主に水草に卵を産む。8 ～ 10cm 前後のイモリの仲間。野生下では主にミミズや昆虫、カエルの幼生などを食べている

生物部では主にミルワームや赤虫などを与えている

ヒョウモントカゲモドキ *Eublepharis macularius* (爬 / 両)



ヤモリ科に属する爬虫類

英名は「レオパゲッコー」であり、通称「レオパ」とも呼ばれている

特徴としては過酷な砂漠環境で生き抜くために尻尾と前足の付け根に栄養を溜め込んでいることだ

本来パキスタンやアフガニスタンなどに生息しており、野生では昆虫や小型のヤモリ類などを食べていて、生物部ではゴキブリを餌としてやっている。

ニホンアマガエル *Hyla japonica* (爬 / 両)



ニホンアマガエルは日本から中国、韓国などにかけて生息する体長2～5 cmほどの小型のカエル。通常は緑色だが環境によって色々な色に変わり、眼から体側にかけて黒いラインがあるのが特徴。春から夏にかけて水辺で産卵し、オスは鳴いてメスを呼びます。主に小さな昆虫やクモ類、無脊椎動物などを食べ、夜行性。生物部では、飼育ケースに浅い水をしいて、ワームや人工餌をあげている。

モリアオガエル *Rhacophorus arboreus* (爬 / 両)



名前の通り、森に住む青（今は緑）色のカエル。吸盤があるカエルの中ではかなり大型で5～7 cmになる。産卵する時に水質が安定した静かな池の上に粘液で泡を作りそこに産卵する。幼虫は孵化したらそこから池に飛び込む。眼過線が薄い。

トウキョウダルマガエル *Pelophylax porosus* (爬 / 両)



トウキョウダルマガエルは関東平野、仙台平野、新潟県と長野県に生息する

トノサマガエルによく似ている。体長はウシガエルやヒキガエルの半分程度

「ンゲゲゲ、ンゲゲゲ」と鳴く

生物部では練り餌をあげている

もう、完全に人に懐いてしまった

アオダイショウ *Elaphe climacophora* (爬 / 両)



アオダイショウは、日本全国に広く分布する無毒のヘビで、ナミヘビ科に属する。体長は1.5～2メートルに達することがあり、青緑色の体色が特徴。森林や農地、民家の周辺など、さまざまな環境に適応して生活している。主にネズミや小鳥、両生類などを捕食し、農作物を害するネズミの駆除にも役立つ存在として知られている。比較的人に慣れやすく、飼育する愛好者もいる。春から秋にかけて活発に活動し、冬は冬眠する。

モツゴ *Pseudorasbora parva* (魚)



都市周辺部の汚染度の高い水域でも見ることのできる淡水魚。元々は関東以西にしか生息していなかったが、高い環境適応能力によって近年東北地方や北海道などへの移入が認められている。地域によってはクチボソとも呼称される。

カワアナゴ *Eleotris oxycephala* (魚)



河川の下流域に生息する大型のハゼ。関東以西に生息し台湾や濟州島などにも分布している。生物部で現在飼育している個体はおそらく魚の中で一番昔から飼育をしている

ヒガシマドジョウ *Cobitis sp. BIWAE type C* (魚)



体長が10cm前後になる淡水魚。河川中流・湖沼などの砂底に生息する日本固有種。名前の通り体に縞模様を持っており、体は細長く、3対6本のヒゲを持っている。近年一部地域でこの種の関西型であるニシマドジョウが生息域に移入し交雑個体が確認されている。

カサゴ *Sebastes marmoratus* (魚)



カサゴは、日本の海でよく見られる魚で、岩場や防波堤の近くで釣れる。生息環境により体の色が変わる。深みに生息するものほど赤く、浅場に生息するものは黒っぽいと言われている。生物部にいる個体はある部員が釣ってきたもの。まあまあ大きい。

カワムツ *Nipponocypris temminckii* (魚)



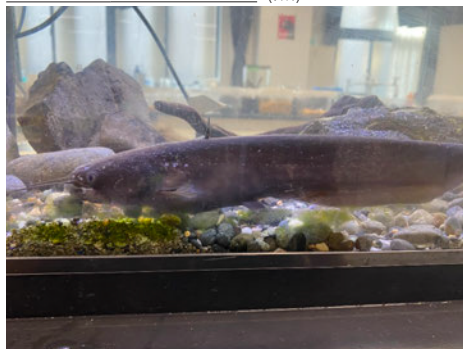
オスがメスよりも大きく、オイカワやヌマムツと似た10から15cmの淡水魚で、初夏にオスが鮭のような婚姻色を示す。日本では主に本州や九州、四国に分布しており、朝鮮半島や中国にも生息している。近年関東や東北に侵入している。

コイ *Cyprinus carpio* (魚)



コイ科の淡水大型魚。流れが緩やかな川や池、湖、用水路などに生息し、比較的汚染度の高い水域でも繁殖する。琵琶湖地域原産の在来型と中国など大陸から運ばれてきた大陸型に分けることができる。生物部で飼育しているのは大陸型。

ナマズ *Silurus asotus* (魚)



東アジアの河川や湖沼に生息する肉食の淡水魚で、ナマズ目ナマズ科に属する。別名「マナマズ」。生物部ではキャット(餌)をあげていて、たくさん食べてしまうのであげすぎには注意。

ベラ *Labridae.sp.* (魚)



世界中の温かい海に生息していて日本でもサンゴ礁などに行けば普通に見ることができる。この魚は他の魚とは違い、一部のメスがオスに性別を変えることができる。口は小さくとがっていて、ついばむようにしてエサを食べることに特化している。何度もエサをついばみ、少しずつエサを食べる。そのため釣りをしている少しずつ餌がなくなっていきあげてみると針しか残っていないということになり釣り人からは嫌われている。

オイカワ *Opsariichthys platypus* (魚)



コイ科の淡水魚。オスの婚姻色が虹色でとても綺麗。元々学名が雑魚を意味する *zacco* でかわいそうな学名を持つ魚として有名だったが、近年ハス俗に編入されたことで変わってしまった。

カジカ *Cottus pollux* (魚)



カジカ科の魚。生活方式などで3種類の型に別れており、生物部にいるのは大卵型。山間部ではよく食される。似ている魚にヤマノカミやアユカケなどがおり見分けるのがちょっと難しい。

奇蟲たち *unknown* (寄蟲)

生きてることは確か。今年も多分「何これ？

コスタリカンゼブラレッグ *Aphonopelma seemanni* (寄蟲)



タランチュラの仲間。名前の通り、コスタリカなどの南米に生息している。大きさは最大で 50~60mm であまり大きな種類ではない。生物部にいるやつはまだまだ小さいのでこれから大きくなるだろう。

生物部では主にコオロギをあげていて、コオロギがない場合はデュビアをあげている。

アオズムカデ *Scolopendra subspinipes japonica* L.Koch (寄蟲)



オオムカデ科のムカデ。オオムカデの亜種とされている。北海道と一部離島を除く日本全国でみられ、トビズムカデと並んで代表的なムカデの一つ。強目の毒を持ち、噛まれるとかなり痛いらしい。

バルバドスオオムカデ *Scolopendra subspinipes* (寄蟲)



カリブ地域に生息するオオムカデの仲間。茶褐色のボディに赤色の足を持ち、とてもかっこいい。毒を持つが、強さは不明。

へんしゅーこーき

期限って過ぎるの早いんですよね。

R.I.P. ネズミ

じゃーん！ 私の尻尾焼きでーす！

生物部が丸い？ それ、洗脳だからー！！！！

運動保存がほんにやらかんにやらで重心速度
がウワアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

海水魚 <<<<<< 日淡< 鳥

カブトムシは絶滅危惧種

↑ 捕まえるのが下手なだけ

オイカワは絶滅危惧種()

採集っていつなんですかね

メイドラが頭の中で

動いてます動いてます動いてます…

昔はむらかみ（鶏）がいました

編集長挨拶

文責：(4)

2025 年度部誌編集長のです。本誌を手にとっていただき、誠にありがとうございます。

部員たちの活気が伝わる、鮮度抜群（※締切的な意味でも）の原稿が集まりましたこと、大変嬉しく思います。提出日前日の各班長、そして部長の最後の追い上げのおかげで、無事編集を終えることができました。皆さん、本当にお疲れ様です、そして、ありがとうございます。

さて、不本意ながら二年連続で編集長を務めております。来年こそは辞任する所存ですが、まあ無理でしょう。未来の私、頑張れ。

これを書いているのは印刷前日の9月8日。1週間ほど前まで「原稿がねえ！」と騒いでいたのですが、犯人を特定したところ、未提出の大半が部長でした。世の中とはそういうものです。

とはいえ、こうして巻末言を書ける程度には余裕をもって編集作業は完了しました。しかし、この後には飼育生物の解説カード作成、ラミネート地獄、缶バッジデザイン、クイズ作成が控えています。果たして文化祭当日、私の体力は残っているのでしょうか。

色々書きましたが、言いたいことは一つです。

締め切り守って！！

ここまで読んでくださりありがとうございました。



2025 Bio Quest